

平成27年度大学院総合学術研究科 秋季総合コアプログラムが開催されました

日時 平成27年9月19日(土) 13時30分開始

場所 タワー75 (10階) T-1002会議室



大学院総合学術研究科は、理系・文系の枠をも超え「自然と人間の共生」というテーマのもとに、教育・研究の「総合化」、「高度化」、「国際化」を推し進め、学際的な学問を身に付けた研究者・スペシャリストの養成や社会人・職業人のリカレント教育を実現するという理想のもとに設置され、全教員の意欲をもった創造と努力により、研究科の独自性を追究してきました。

今回の秋季総合コアプログラムにおいては、博士後期課程2年次生による中間発表に加え、修了生講演、外部講師2名による特別講演が開催されました。

博士後期課程2年次学位論文中間発表

鬼頭さんの報告は、シュガービートの塩ストレス応答におけるカチオン、特にカリウムイオンの効果について検討した結果でした。

塩ストレスは植物の生産性を減少させる働きがあるので、植物の塩ストレス応答の仕組みを解明することで、食糧生産、環境、エネルギー問題の解決に貢献することができます。

研究は順調に進んでいるとのことでしたが、先生方からの質問にたじたじとなる場面もありました。



鬼頭 邦英 (生物・環境科学)
「Beta vulgaris の耐塩性に及ぼすイオン、浸透圧適合溶質の役割」

修了生講演 今西 進 (名城大学 薬学部 助教) 「大学院生時代とフィンランドでの研究生活をふりかえって」

今西先生は平成14年に総合学術研究科博士後期課程に入学した一期生です。今回は大学院生時代と、修了後10年間の海外での研究生活を振り返っていただきました。

薬学部の学生時代は、研究に対する興味はそれほどなかったこと。それが、原田研究室に配属されて一変したこと。さらに修了後はフィンランドで充実した研究員生活を送ったことを懐かしみながら話されました。氷点下25度での集合写真が印象的でした。



特別講演

桑江 朝比呂 (国立研究開発法人港湾空港技術研究所) 「気候変動の緩和と適応へのオプションとしてのブルーカーボン」



「ブルーカーボン」とは、国連環境計画 (UNEP) によって2009年に作られた言葉で、沿岸域で固定 (吸収・貯留) される、海に存在する炭素の総称です。

桑江さんは、沿岸海域がCO2の放出源ではなく吸収源であることを実証する研究をされています。生態系モデルを用いた気候変動予測や、気候変動に対する緩和・適応策における沿岸生態系の応答を定量的に予測し、社会経済動態モデルとのカップリングにより、緩和・適応策の有効性について経済的に評価することが重要であると指摘されました。



国分 秀樹 (三重県水産研究所) 「三重県の海域環境修復とブルーカーボン試算の取り組み」



国分さんは、三重県における沿岸域の環境修復についての研究をされています。

将来、我が国が世界的に主要なブルーカーボン貯蔵国となれば、沿岸生態系から大きな恩恵を受けていることとなり、三重県においても、沿岸に分布する生物の炭素固定がブルーカーボンに相当するかどうかを検証することはとても重要な問題です。

伊勢湾岸におけるアマモ場での炭素固定とその貨幣価値を試算した上で、国分さんは、豊かな海を支える干潟藻場の再生への取り組みの重要性を熱く説かれました。

